

京都春期特別集会（1）

旧約聖書の神霊

――創世記、出エジプト、民数紀略ほか――

1991年5月18日

小池辰雄

神霊 創世記 エノク ヨセフ 出エジプト記 モーセ バラム ギデオン サウル ダビデ
エリヤ 本質の徴 ヨブ 詩篇 第一イザヤ 第二イザヤ エレミヤ エゼキエル ヨエル
霊言・霊業 詩「ペンテコステ讃歌」

【創世記1】

27 神はその像に即して人を創造たまえり……

【創世記5】

24 エノク、神と偕に歩みしが神かれを取りたまひければおらずなりき。

【創世記41】

38 ここに於てパロその臣僕にいう我ら神の霊のやどれるかくの如き人を看いだすをえんやと。

【出エジプト25】

20 ケルビムは翼を高く展べその翼をもて贖罪所を掩いその面を互に相向くべし。すなわちケルビムの面は贖罪所に向うべし。21 汝贖罪所を櫃の上に置え、また我が汝に与うる律法を櫃の中に蔵むべし。22 其処にて我なんじに会い贖罪所の上より律法の櫃の上なる二箇のケルビムの間よりして我イスラエルの子孫のためにわが汝に命ぜんとする諸の事を汝に語らん。

【出エジプト28】

3 汝凡て心に智慧ある者すなわち我が智慧の霊を充しおきたる者等に語りてアロンの衣服を製しめ之を用てアロンを聖別て我に祭司の職をなさしむべし。

【出エジプト31】

3 神の霊をこれに充して智慧と了知と智識と諸の類の工に長しめ

【民数紀略11】

24 ここに於てモーセ出きたりてエホバの言を民に告げ民の長老七十人を集めて幕屋の四圍に立たしめけるに、25 エホバ雲の中にありて降たりモーセと言ひモーセのうえにある霊をもてその長老七十人にも分ち与えたまいしがその



霊かれらの上にやどりしかば彼等預言せり。但しこの後はかさねて為ざりき……²⁹ モーセこれに言いはるは汝わがために娼嫉^{ねたみ}を起すや。エホバの民の皆預言者とならんことまたエホバのその霊を之に降だしたまわんことこそ願わしけれ。

【民数紀略24】

¹ バラムはイスラエルを祝することのエホバの心に適^{かな}うを視たればこの度は前の時のごとくに往きて法術を求むる事を為^せずその面を曠野に向けて居り。² バラム目を挙げてイスラエルのその支派^{わかれ}にしたがいて居るを觀^みたり。時に神の霊かれに臨みければ、³ 彼すなわちこの歌をのべて云く、ベオルの子バラム言う目の啓^{ひら}きたる人言う。⁴ 神の言詞^{ことば}を聞きし者、能^{あた}わざる無き者をまぼろしに觀し者、倒れ臥^ふしてその目の啓けたる者言う、⁵ ヤコブよ汝の天幕は美^{うるわ}しき哉、イスラエルよ汝の住所^{すまい}は美しき哉。……¹² バラム、バラクに言いはるは我は汝が我に遣^{つか}しし使者等に告げて言わざりしや。¹³ たといバラクその家に盈^みるほどの金銀を我に与うるとも我はエホバの言をこえて自己^{おのれ}の心のままに善^{よき}も悪^{あし}きも為すことを得ず。我はエホバの宣^{のたま}う事のみを言うべしと。……¹⁷ 我これを見ん、然れど今にあらず。我これを望まん、然れど近くはあらず。ヤコブより一箇の星いでん。イスラエルより一條^{ひとすじ}の杖おこり、モアブをこなたよりかなたに至るまで撃破^{うちやぶ}り、また鼓譟^{こさつもの}者どもを尽^{ことごと}く滅ぼすべし。

【士師記3】

¹⁰ エホバの霊オテニエルにのぞみたれば……

【士師記6】

¹² エホバの使^{つかい}これに現れて剛勇丈夫^{ますらたけお}よ、エホバ汝とともに在ますといいたれば……¹⁶ エホバこれにいたまいけるは我かならず汝とともに在らん。汝は一人を撃つがごとくにミデアン人を撃つことを得ん。……²³ エホバこれにいたまいけるは心安^{やすみ}かれ怖^{おそ}るる勿^なれ汝死ぬることあらじ。²⁴ ここにおいてギデオンかしこにエホバのために祭壇を築き之をエホバシャロムと名^{なづ}けたり。……³³ エホバの霊ギデオンに臨みて……

【士師記11】

²⁹ ここにエホバの霊エフタに臨みしかば……

【士師記14】

⁶ エホバの霊彼にのぞみたれば……

【サムエル前10】

⁶ その時神のみたま汝にのぞみて汝かれらとともに預言して變りて新しき人



とならん。⁷これらの徴汝の身におこらば手のあたるにまかせて事を為すべし神汝とともにいませばなり。……⁹サウル背をかえしてサムエルを離れし時神これに新しき心をあたえたもう。しかして此のしるし皆その日における。¹⁰……神の霊サウルにのぞみてサウルかれらの中にありて預言せり。

【サムエル前16】

¹²ここにおいて人をつかわしてかれをつれきたらしむ。その人色赤く目美しくして其の貌麗し。¹³エホバいいたまひけるは起てこれにあぶらを沃げ、これ其の人なり。¹⁴サムエル膏の角をとりて其の兄弟の中にてこれに膏をそそげり。此の日よりのちエホバの霊ダビデにのぞむ。サムエルはたちてラマにゆけり。¹⁵かくてエホバの霊サウルをはなれ、エホバより来る悪鬼これを悩ませり。……¹⁶神より出でたる悪鬼サウルに臨めるときダビデ琴を執りて手をもてこれを弾くにサウル慰みて癒え悪鬼かれをはなる。

【サムエル後23】

¹ダビデの最後の言はこれなり。エサイの子ダビデの詔言即ち高く挙げられし人やコブの神に膏をそそがれし者イスラエルの善き歌人の詔言。²エホバの霊わが中にありて言いたもう。その諭言わが舌にあり、³イスラエルの神いいたもう。イスラエルの磐われに語たもう……。

【列王記略上18】

¹²然れど我汝をはなれて往くときエホバの霊我がしらざる処に汝を携えゆかん……。……²⁰ここにおいてアハブ、イスラエルのすべての子孫の中に人を遣り預言者をカルメル山に集めたり。²¹時にエリヤすべての民に近づきて言いはるは汝等何時まで二つの物の間にまようや。エホバ若し神ならば之に従え、されどバアル若し神ならば之に従えと。民は一言も彼に答えざりき。²²エリヤ民に言いはるは惟だ我一人存りてエホバの預言者たり。然れどバアルの預言者は四百五十人あり。……³⁷エホバよ、我に応えたまえ、我に応えたまえ。この民をして汝エホバは神なることおよび汝は彼等の心を翻えしたもうということを知らしめたまえと。³⁸時にエホバの火降りて燔祭と薪と石と塵とを焚きつくせり。亦溝の水をすいからせり。³⁹民皆見て伏していいけるはエホバは神なりエホバは神なり。

【ヨブ32】

⁸但し人の衷には霊あり。全能者の氣息人に聡明を与う。

【ヨブ33】

⁴神の霊われを造り、全能者の氣息われを活かしむ。……²⁸神わが靈魂を贖いて墓に下らしめず、わが生命光明を見ん。



【ヨブ34】

14 神もしその心を己にのみ用い、その霊と氣息とを己に収回したまわば、^{ひきもど}15 もろもろの血肉ことごとく亡び、人もまた塵にかえるべし。

【詩篇33】

6 もろもろの天はエホバのみことばによりて成り、てんの万軍はエホバの口の氣によりてつくられたり。

【詩篇51】

10 ああ神よわがために清心をつくりわが衷になおき霊をあらたにおこしたまえ。^{きよめこころ}11 われを聖前より棄てたもうなかれ。^{みまえ}汝のきよき霊をわれより取りたもうなかれ。……17 神のもとめたもう祭物はくだけたる靈魂なり。^{そなえもの}神よなんじは砕けたる悔いしところをかるしめたもうまじ。

【詩篇104】

30 なんじ霊をいだしたまえば百物みな造らる。^{みなもの}なんじ地のおもてを新たにしたもう。

【詩篇139】

4 げにわが舌に一言もないのに見よ、神よ、汝はその総てを知り給う。……7 私は何処へ往つて汝がみ霊を離れようや。何処へ遁れて汝がみ顔を離れようや。^{のが}8 たとい天に昇るとも、そこにあなたが！わが床を陰府に布くとも、見よ汝が。(私訳)

【イザヤ11】

1 エッサイの株より一つの芽いでその根より一つの枝はえて実をむすばん。¹2 その上にエホバの霊とどまらん。これ智慧聰明の霊、謀略才能の霊、知識の霊、エホバをおそるるの霊なり。²かれはエホバを畏るるをもて歡樂とし、また目みるところによりて審判をなさず、耳きくところによりて断定をなさず、³4 正義をもて貧しき者をさばき、公平をもて国のうちの卑しき者のために断定をなし、その口の杖をもて国をうち、その口唇の氣息をもて悪人をころすべし。

【イザヤ19】

24 その日イスラエルはエジプトとアッシリヤとを共にし、三つあいならび地のうえにて福祉をうくる者となるべし。^{さいわい}25 万軍のエホバこれを祝して言いたまわく、わが民なるエジプトわが手の工なるアッシリヤわが産業なるイスラエルは福いなるかな。^{さいわ}

【イザヤ40】

13 誰かエホバの霊をみちびきその義士となりて教えしや。^{はかりびと}14 エホバは誰とと



もに議^{はか}りたまひしや。たれかエホバを聴^{きこ}くしこれに公平の道をまなばせ知識をあたえ明通^{さとり}のみちを示したりしや。……¹⁷エホバの前にはもろもろの国民はみななきにひとし。エホバはかれらを無^なきもののごとく空しきもののごとく思いたもう。……²⁷ヤコブよなんじ何故にわが途^{みち}はエホバにかくれたりというや。イスラエルよ汝なにゆえにわが訟^{うったえ}はわが神の前をすぎされりとかたるや

【イザヤ42】

¹わが扶^{たす}くるわが僕わが心よろこぶわが撰^{えらび}人を見よ。我わが霊^{みたま}をかれにあたえたり。かれ異邦^{ことくにびと}人に道をしめすべし。²かれは叫ぶことなく声をあぐることなくその声を街頭^{ちまた}にきこえしめず、³また傷める蘆^{あし}をおることなく、ほのくらき燈火^{ともしび}をけすことなく、真理^{まこと}をもて道をしめさん。……⁵天をつくりてこれをのべ、地とそのうえの産物^{なりいでもの}とをひらき、そのうえの民に息をあたえ、その中をあゆむものに霊をあたえたもう神エホバかく言い給う。

【イザヤ43】

¹ヤコブよなんじを創造せるエホバいまかくいい給う。イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言い給う。おそるるなかれ我なんじを贖^あえり。我なんじの名をよべり。汝はわが有^{もの}なり。

【イザヤ44】

³われ渴けるものに水をそそぎ、乾^ひたる地に流れをそそぎ、わが霊^{たま}をなんじの子輩^{こら}にそそぎ、わが恩恵^{めぐみ}をなんじの裔^{すえ}にあとうべければなり。

【イザヤ45】

¹⁵救をほどこし給うイスラエルの神よまことに汝はかくれています神なり。

【イザヤ59】

²¹エホバいい給わく、なんじの上にあるわが霊^{たま}なんじの口におきたるわがことばは今よりのち永遠になんじの口よりなんじの裔^{すえ}の口より汝のすえの裔^{すえ}の口よりはなれざるべし。わがかれらにたつる契約はこれなりと。此はエホバのみことばなり。

【エレミヤ20】

⁷エホバよ汝われを勧め^{すす}たまいてわれその勧めに従えり。汝我をとらえて我に勝ち給えり。われ日々に人の笑となり人皆我を嘲りぬ。

【エレミヤ23】

⁹預言者輩^{たち}のために我心はわが衷^{うち}に壊^{やぶ}れわが骨は皆震う。且つエホバとその聖^{きよ}言^{ことば}のためにわれは酔える人のごとく酒に勝たる人のごとくし。……²⁹エホバ言いたまわく、我言は火のごとくならずやまた磐^{いわ}を打ち砕^{つぶ}く槌^{つち}の如くな



らずや。

【エゼキエル1】

20 凡て霊のゆかんとする所には生物^{いきもの}その霊のゆかんとする方に往く。輪またその傍らに上がる。これ生物の霊輪の中にあればなり。

【エゼキエル3】

14 霊われを上にあげて携えゆけば我^{にがにが}苦々しく思い心を熱くして往く。エホバの手強くわが上にあり。

【エゼキエル11】

19 我かれらに唯一の心を与え新しき霊を汝らの衷に賦^{さず}けん。我かれらの身の中より石の心を取りさりて肉の心を与え……

【エゼキエル18】

31 汝等その行いし諸々の罪を棄て去り新しき心と新しき靈魂^{たましい}を起こすべし。

【エゼキエル37】

1 ここにエホバの手我に臨みエホバ我をして霊にて出で行かしめ谷の中に我を放^おき賜う。そこには骨充てり。……³彼われに言いたまいけるは人の子よこれらの骨は生くるや。我言う主エホバよ汝知りたもう。……⁵主エホバこれらの骨にかく言いたもう。視よ我汝らの中に氣息^{いき}を入らしめて汝等を生かしめん。……⁹彼また我に言いたまいけるは、人の子よ氣息に預言せよ人の子よ預言して氣息に言え。主エホバかく言いたもう、氣息よ汝四方の風より来たりこの殺されし者等の上に呼吸^{いぶき}てこれを生かしめよ。……¹⁴我わが霊を汝らの中におきて汝らを生かしめ汝らをその地に安んぜしめん。

【エゼキエル39】

29 我わが霊をイスラエルの家にそそぎたれば……

【ヨエル2】

28 その後われわが霊を一切の人に注がん。汝らの男子女子は預言せん。汝らの老いたる人は夢を見、汝らの少き人^{わか}は異象^{まぼろし}を見ん。29 その日我またわが霊を僕婢に注がん。

●神霊

こんばんわ。O先生の心からの開会の、また証言のお言葉、身にしみて感謝しております。また、同時にそれは皆さんのお気持で、私は聖前に平伏すばかりです。

「旧約聖書の神霊」

という、非常に大きな題で、これをもし本当にやれば、徹夜しても話しきれない、旧約聖書におよそ関わることになりますから、特にその中の著しい所をつまんでお話したいと思



います。

聖書は大変な本です。私は何か説明的なことは致しません。「神の霊」に――エホバの神として現れた、キリストが「父」と呼ばれた、この神の霊、神の業、神の言、全部これは神霊が元になって、それがいろいろな相で展開しているわけですから――自在に触れさせていただきたいと思っております。

「数」ではない、「質」です。キリストの十二の弟子も、結局、新約聖書を書かしめられたのは数名に過ぎない。

この文字ならざる文字をナポレオンが、

「これは文字ではない、生き物だ」

と言いました。さすがはナポレオンです、セント・ヘレナでそのことを告白した。ナポレオンは英雄ですが、しかし本当に最後に平伏して天国に行きました。

では、聖書にぶつかっていきましょう。

神さまの御言は「霊言」です。単なる言葉じゃない。だから、聖書の「神霊」なんて言ったら、「霊言」であり「霊業」である。もともとそういう御霊の世界です。

日本人は、日本の教育者が神霊の世界を全然いいかげんにしている。そんなことで教育ができるか、と。日本の教育に対しては望みが持てないです。学校に望みが持てなければ、仕方がない、家庭に求める。家庭のお父さん、お母さん。特に父親が大体ダメだね。母親が、女の方が宗教の世界に入って、そして、子供を、魂の育て方をしないことには、日本は滅びる。つくづくそう思います。お父さん、お母さんがそろってクリスチャン、或は仏教徒なんていうのは滅多にいない。この滅多にいない中の方々が、あなた方のご家庭である。非常に責任が重い。また使命が重い。栄光が重い。こういうわけです。

「日本の滅びは我々がくいとめるぞ」

と。神さまに、

「お前たち、くい止めろ」

と、委ねられているわけです。

「千万人といえども吾往かん」

と孔子が言ったけれども、その意気込みは我々が戴いている。「クリスチャン」といったって、それだけの存在が本当の「キリスト者」です。私は、この「日本キリスト召団」の方々にその事を期待しているし、かく成ると信じて進んで行きます。

数が問題じゃない。質は数に逆比例する。それで、私は

「孤軍万軍」

というようなことを言った。世界の歴史は、皆さん一人びとりが、個が担っている。また、個がサタンの手下になると、これが乱していく。個というのは、困ったものです。また、非常に大事なものです。それほど魂が、



「もし、この神の国を失ったら、全世界を得るとも何の益あらん」とキリストが言われた、あのキリストの極端な言が本当なんです。そういう個の集団こそ、これは切っても切れない。そういうわけです。私は非常に始めっから楽しくてしようがない。力が来てしようがない。

●創世記

では、聖書に入っていきます。最初の言は、

「光あれ」

でしたね。

「汝らは世の光なり」

と。キリストは世の光です。我々もキリストに在って世の光。神の言と業は即していますから。そして、光なんです。電灯の光じゃない。太陽の光。大詩人ゲーテが、キリストという光と太陽という光に無条件に頭を下げるという。「二つの太陽」(ツヴァイ・ゾンネ)と題していつか書きました。日本にはそういう大きな光の詩人がいないんだよね。

日本が「経済大国」だといったって、何だというんだ。冗談じゃない。経済亡国なんだ。お金を出せばいいなんて、そんなものじゃない。

「宗教大国になる」

という、我々の悲願霊願はそこにあるんです。しかし決して、数ではそうはなりません。

「汝らは世の人に憎まれる、我が名のゆえに」

と。キリストが最後に独りになったわけですよ、十字架にね。これはもう当然のことなんです。大変なひとだ。もうね、「主さま!」とか「キリスト!」と言うと、全身が火になる。私はしゃべるのが嫌になる。

「²⁷神はその像に^{かたち}即して人を創造^{つく}たまえり……」(創世記1・27)

我々は、本来は、「無相の相」である神の相^{すがた}を中に持つている。

「本来はそうである」

という気持をゲーテは持っていた。

「神と同じ姿」(エーベンビルト・ゴッテス)

という言葉を非常に好きだった。

ゲーテはこういうことを言っています。

「私は特にスピノーザに引きつけられたのは、その一句一句から無際限な没我主義が輝き出ているからです。『真に神を愛する者は、神からも愛されることを願ってはならない』」

これはスピノーザの言葉です。「ゲーゲン・リーベ」(対価の愛)を欲するなど。

というあの感動すべき言葉は、その一切の前提とそれから生ずる一切の帰結と共に私



の瞑想を隈なく満たした。何事にかけても没我的

おのれを没することですね、無我、没我。没我的最たる者はキリストに決まっていますが、であること、愛と友情にかけて最も没我的であること、それは私の最高の喜びであり、私の格言であり、私の実行であった。」

と。スピノーザはユダヤ人です。眼鏡磨きをやっていた。ゲートはスピノーザの哲学そのものには、すぐ賛成はしませんでしたけれども、彼の精神には非常に感動した。何といつても、ドイツで一番でっかい人物はゲートなんです。

その「没我」、我なき世界。いつも書いている通り、

「0=∞」(ゼロ=無限大)

ゼロが無限大だ。没我というのは虚無じゃない。

●エノク

「²⁴エノク、神と偕に歩みしが神かれを取りたまいければおらずなりき。」(創世記5・24)

「神と偕に歩んだ」といったって、そうすると、エノクは偉いかと思うと、どっこいそうじゃない。

「私はなかなか神とともに歩みません」

と。歩みませんよ、神さまにとっ捕まえられなければ。嫌でも応でも、神さまにとっ捕まつて、神さまに捕まったら、その手が離せるかと。神の力はそういう圧倒的な力。共に歩まざるを得ない。それは、平伏す魂は歩まざるを得なくなる。平伏さなければ、神さまとは歩みません。

「エノク、平伏して、神と偕に歩めり」

ということ。「平伏して」という言葉はないものだから、エノクは偉そうに思うけれども、少しも偉くない。

「参りました!」

と言って平伏したら、神さまの力が神さまの手で――神さまの「手」と言ったって、「手」はありはしない。霊的な引力で――それでもつてひつつけられて、歩まざるを得ない。

とにかく、我々の信仰ならざる信仰は、絶対に上からの力で動かされる。

「信仰なんかありませんよ」

と言った方が本当なんだ。キリストが、

「汝の信仰、なんじを救えり」

なんて仰るものだからね、

「さあ大変だ、私の信仰は、救いになるような信仰にいつなるだろうか」

なんて思う。いつになったって、なりはしませんよ。



「信仰なんて捨てろ、絶信しろ、上からの信をいただけ」
と。これが浄土真宗、親鸞の信の世界です。

エノクがそのように、神に引つ張られて、共に歩かざるを得なくなったから、見えなくなつてしまった。その通りです。偉い人なんか一人もいませんよ。キリストも偉くなかった。

「なぜ、私のことを善いというか」

と。偉いのは神さまだけ。こんなことを普通の牧師さんは言わないね。

「あれは神の子だから」

なんて。ところが、一番偉くないキリストが、

「我を見し者は父を見しなり」

とおっしゃった。これが、

「ゼロ・イコール・無限大」(0=∞)

の世界なんです。もう楽しくてしょうがないですよ、こういうのは。

●ヨセフ

創世記41章。ヨセフという人は、正に旧約の最初のキリストの予表みたいな人です。

「アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ」

のヨセフ。兄弟から捨てられて、エジプトに売られてしまった。ところがどっこい、エジプトで宰相にまでなつて、いろいろ不思議なパロの夢を解いたり、

「七年の饑饉と七年の豊作のことや、牛の痩せたのと太つたのは一体何ごとだ」

なんて、それを彼は解いてやった。その通りになつた。そこで、

「³⁸ここに於てパロその臣僕^{けらい}にいう我ら神の霊^{みたま}のやどれるかくの如き人^みを看い

だすをえんやと。」(創世記41・38)

こんな人が他にいるかと。びっくりしてしまった。こういう驚嘆の言葉が非常にひびく。何も信じていないんだけど、

「参りました！ お前は大変なやつだ」

と。そこで、カナンの方も饑饉になつてしまったものだから、ヤコブが兄さんたちを使い遣わした。二度目の時に、とうとうヨセフであることが分かった。皆が驚き、また、あやまつた。ヨセフは、

「いや、あやまる必要はない。あなた方を救うために、神さまが私をここへ連れて

きたのだ」

と応えた。「神に在る」ということは、そういうことですね。

「キリストに在る」

ということ。人間だから、躓いたり転んだりしますよ。いいですよ。しかし本質的にはそこに「在る」ということ、「ビー・クリスチャン」(キリスト者在る)ということが大事です。



私は破れ器。パウロが、

「**我は罪びとの首**」^{かしら}

と言った。パウロは第一の「罪びとの首」。内村鑑三が、

「私みたいな者が救われたんだから、誰でも救われる。私は罪びとの首なんだ」

と、戦場ヶ原でそのことを言った。私は第三番目の「罪びとの首」。だけれども、本当の「罪びとの首」はキリスト自身です、十字架でもつて。

「お前たちの罪なんかは五十歩百歩だ、私が全部引き受けたぞ」

というのが、これがイエス・キリストの十字架ですから。お釈迦さんの「大慈大悲」もいけれども、キリストの十字架は決定的な救いなんです。過去・現在・未来の私はもう救われきっている。

「私の信仰はまだですから、救われるか救われないか分かりません」

なんて、そんなことではないんだ、ひとつも。仏教の方でも凄いのがいるよ。

●出エジプト記

ヨセフ、これが神の霊の宿った証者。ユダヤ人というのは大体、我が強い。だけれども、本当にそこを突き抜けた人が時々出てくる。パウロなんかは私の強いやつだ。これがどうしても碎けないものだから、キリストに碎かれたんだ。ひっくり返されてしまった。そうしてもう、最大の人になった。キリストを除いては、まあパウロという人は大変な人だ。この人は本当にキリストに見込まれたね、

「お前は、本当に使うぞ」

と。新約聖書の中心は、このパウロですからね。もちろん、福音書は別な意味で中心ですけれども。

「³汝^{すべ}凡て心に智慧ある者すなわち我が智慧の霊を^{みた}充しおきたる者等に語りてアロンの衣服を^{つく}製しめ之を用てアロンを^{きよめ}聖別て我に祭司の職を^{つとめ}なさしむべし。」(出エジプト28・3)

「我が智慧の霊を充しおきたる者等」

という不思議な言葉がある。神の霊は光を持っている、力を持っている。それから、智慧を持っている。もう一つ、もちろん愛を持っている。神の霊は、そんな限定できません、ものすごい内容ですから。所々に、それが出てきます。

「²⁰ケルビムは翼を高く展^のべその翼をもて贖罪所を^{おお}掩いその面を互に相向くべし。すなわちケルビムの面は贖罪所に向うべし。²¹汝贖罪所を^{はこ}櫃の上に置^すえ、また我が汝に与うる律法を櫃の中に^{おさ}蔵むべし。²²其^{そこ}処にて我なんじに会い贖罪所の上より律法の櫃の上なる二箇のケルビムの間よりして我イスラエルの子孫のためにわが汝に命ぜんとする^{もろもろ}諸の事を汝に語らん。」(出エジプト25・



20(22)

律法と、それから、罪を贖う事態がその上にあつて、その上から語る神の言。これが本当の構造なんです。その贖罪の空間がないというと、語った言葉が本当は響かない。それは、新約でそうなんだ。罪の贖いという、新約の型がもう既にここにできている。

今言った、28章の3節と似た所は、31章の3節、

「³神の霊をこれに充^{みた}して智慧と了知^{さと}と智識^{ちしき}と諸^{もろ}の類^{たぐい}の工^{わざ}に長^{たけ}しめ」(出エジプト31・3)

これがみんな、神さまとの出会いの幕屋の構造のところ。贖罪の構造のところが述べられている。35章の31節にも同じことが出ている。大事なことですからね。

●モーセ

民数紀略11章、ここにちよつと注目すべき言葉がある。

「²⁴ここに於てモーセ出^{いで}きたりてエホバの言を民に告げ民の長老七十人を集めて幕屋の四圍^{まわり}に立たしめけるに、²⁵エホバ雲の中にありて降^{くだ}りたりモーセと言^{ものい}いモーセのうえにある霊をもてその長老七十人にも分ち与えたまいしがその霊かれらの上にやどりしかば彼等預言せり。但しこの後はかさねて為^せざりき」(民数紀略11・24・25)

不思議なことなんだ。七十人に一時に神の霊が宿った。

「²⁹モーセこれに言いけるは汝わがために嫉^{ねたみ}妬^{ねたみ}を起すや。エホバの民の皆預言者とならんことまたエホバのその霊を之に降だしたまわんことこそ願わしけれ」(民数紀略11・29)

「本当の意味の預言者になるのに、何も差し支えないじゃないか。妬むな」と。そういうような会話が出ているところですね。神の霊です。

●バラム

それから、面白いのは、民数紀略の24章の所。

「バラムはイスラエルを祝することのエホバの心に適^{かな}うを視たればこの度は前の時のごとくに往きて法術を求むる事を為^せずその面を曠野に向けて居り。²バラム目を挙げてイスラエルのその支派^{わかれ}にしたがいて居るを觀^みたり。時に神の霊かれに臨みければ、³彼すなわちこの歌をのべて云く、ベオルの子バラム言う目の啓^{ひら}きたる人言う。⁴神の言詞^{ことば}を聞きし者、能^{あた}わざる無き者をまぼろしに觀^みし者、倒れ臥^ふしてその目の啓けたる者言う、⁵ヤコブよ汝の天幕は美^{うるわ}しき哉、イスラエルよ汝の住所^{すまい}は美^{うるわ}しき哉」(民数紀略24・1・5)

誉めて讚美しているわけです。バラムが祝福している。本当は信じてないんだけど、



神さまの霊にとつ捕まったものだから、こういうことを言っている。だから終りに面白いことが書いてある。

「¹²バラム、バラクに言いけるは我は汝が我に遣しし使者等に告げて言わざりしや。¹³たといバラクその家に盈るほどの金銀を我に与うるとも我はエホバの言をこえて自己^{おのれ}の心のままに善も悪きも為すことを得ず。我はエホバの宣もう事のみを言うべしと」(民数紀略24・12・13)

異邦人がここではつきり言っている。金の問題じゃないぞと。そして、何を言っているかというと。

「¹⁷我これを見ん、然れど今にあらず。我これを望まん、然れど近くはあらず。ヤコブより一箇の星いでん。イスラエルより一條の杖おこり、モアブをこなたよりかなたに至るまで撃破り、また鼓譟者どもを尽く滅ぼすべし」(民数紀略24・17)

「一つの星」とか「一条の杖」というのは、それが実現したのはダビデです。そういう神の霊が、また御言が伝わってきた。

「霊」とは、「ルーアツハ」というんです。「ネフェシュ」という、「心」とか「魂」という字が別にありますけれども。「霊」というのは一番大事な字です。「ルーアツハ」は非常に、「風」という字にも使う。それから、「気」、「氣息」。「神の息」だとか。

日本語の訳をみると、「心」とか「思い」とか訳しているところもあるが、それは訳がちよつとどうかと思う。

●ギデオン

士師記の人物は選びのカリスマ的な人物です。

「¹⁰エホバの霊オテニエルにのぞみたれば……」(士師記3・10)

「エホバの霊」、「エホバの霊」と、出てくる。士師たちは、非連続の連続で、不文律でもって、イスラエルを治めたご連中です。

「¹²エホバの使^{つかい}これに現れて剛勇丈夫^{ますらたけお}よ、エホバ汝とともに在ますといいたれば」(士師記6・12)

神さまが

「汝とともに在ます」

という時には、もちろん、神さまは霊の力でもって共にいてくださる。

「⁶エホバこれにいいたいけるは我かならず汝とともに在らん。汝は一人を

撃つがごとくにミデアン人を撃つことを得ん。」(士師記6・16)

「相手が何人でも大丈夫だ。私が一緒だ」

と。出エジプト記のところもそうです。モーセの出エジプトの所、あれも正にモーセは完



全に神さまの力で動いていた。手を挙げれば、波が左右に分かれたり、手を下げれば波が塞がったり。大変な事です。この神の霊の働きが言葉となつて現れたり、業となつたり、自由自在に出てくるわけですから。

「エホバ、汝と共にあり」

「我、汝と共にあり」

と。旧約では「共に」という言い方が多いので、「中に」というのは滅多に出てこない。

「²³エホバこれにいたまいけるは心安かれ怖る勿れ汝死ぬることあらじ。

²⁴ここにおいてギデオンかしこにエホバのために祭壇を築き之をエホバシヤ

ロムと名けたり」(士師記6・23、24)

「平安の神」と名づけた。「平安」と訳すべきところをよく「平和」と訳されて困るよ、『共同訳』を見ても。神さまとの関係のときは、「平和」じゃダメなんです。新約でもそうだね。

「キリストは神さまとの間に平和をもたらしした」

とあるが、「平和」じゃないよ、

「平安」

だ。これははっきり区別して、私は使いますから。平安は縦の関係、平和は横の関係。人と人の関係は平和。平安のないところに平和はない。偽りの平和だ、そんなものは。もう皆さん、本当にキリストのこの現実、権威をもつて戦ってくださいよ。

「³³エホバの霊ギデオンに臨みて……」(士師記6・33)

と書いてある。旧約でも時々、

「聖き霊」「聖霊」

という言葉を使つてあるところが時々ありますけれども、「聖霊」とははっきり言う時には、これは

「キリストによるところの霊」

でなければ聖霊という言葉はあまり使わない方がいい。「聖霊」は新約の言葉。旧約の方は「神霊」

です。

「²⁹ここにエホバの霊エフタに臨みしかば……」(士師記11・29)

「⁶エホバの霊彼にのぞみたれば……」(士師記14・6)

と、14章はサムソンのことがいろいろありますから、非常に面白い所です。16章でもつて、ついにサムソンはダゴンの偶像を全身でもつてひっくり返してしまふ。「サムソン」というのは「シムシオン」といって「太陽の子」という字です。「セメシュ」という字からくる。

●サウル

「⁶その時神のみたま汝にのぞみて汝かれらとともに預言して変りて新しき人



とならん」(サムエル前10・6)

ここは大変なところだ。サムエルを通して、サウルに霊が注がれるわけだ。「新しき人」という訳は「別人」と訳してもいい。「別人」となる。

「⁷これらの微汝の身におこらば手のあたるにまかせて事を為すべし神汝ともにもいませばなり」(サムエル前10・7)

手あたり次第でよろしいと。それはもはや、我意で、自分の意志でやっているのではない。神の霊で動かされているんだから、大丈夫だよ、心配要らんよ、と。孔子の

「わが思うところ矩を躐えず」(七十にして心の欲する所に従って矩を躐えず)

なんていう世界じゃない。孔子は七十でそんなことを言っただけでもない。何も思わない、神さまの手先になって動く。始めはサウロはそうだった。サムエルでもって、サウロに神霊が本当に化体したものだから。そして、

「⁹サウル背をかえしてサムエルを離れし時神これに新しき心をあたえたもう。しかして此のしるし皆その日におこれり。¹⁰……神の霊サウルにのぞみてサウルかれらの中にありて預言せり」(サムエル前10・9・10)

と書いてある。「新しき人」「新しき心」「新しき神の霊」。それでサウロはエライことになった。本当にカリスマ的な最初に出てきた王様になった。「新しき」とは「別な」、「ハータック」という字です。

●ダビデ

ところが、サウルに素晴らしい弟子ができた。今度はその弟子を妬みだした。これがダビデです。サムエルの大きなドラマはそれから始まるわけです。

「¹²ここにおいて人をつかわしてかれをつれきたらしむ。その人色赤く目美しくして其の貌麗し。^{かたちうつく}エホバいたまいけるは起てこれにあぶらを^{そそ}洗、これ其の人なり。^{あぶら}¹³サムエル膏の角をとりて其の兄弟の中にてこれに膏をそそげり。此の日よりのちエホバの霊ダビデにのぞむ。サムエルはたちてラマにゆけり。¹⁴かくてエホバの霊サウルをはなれ、エホバより来る悪鬼これを悩ませり。」(サムエル前16・12・14)

「エホバより来る悪鬼これを悩ませり」

と、不思議なことが書いてある。「エホバから悪鬼が来た」と。こういうのは躓いてしまう。これは、サタンがサウルを揺り動かすわけです。サタンは、もちろんエホバにかなわないんだけれども。それで、神さまが今度はサウルからダビデの方に支配を移すので、こういうことになってしまった。サウルに、エホバの深慮からやって来たところの、悪鬼がこれを悩ましたと。それは、サウルに対する一つの罰なんです。彼の在り方が、ダビデを妬んでいるから。だけれども、ダビデはどこまでもサウルを王様として、「敵は本能寺にあり」



をやらない。どこまでも逃げていった。力はダビデの方があるんだけれども。それで、琴を弾いて慰めてやる。その時はちよつと良くなるけれども、またダメになる。そういうことを繰り返す。

「²³神より出でたる悪鬼サウルに臨めるときダビデ琴を執りて手をもてこれを弾くにサウル慰みて癒え悪鬼かれをはなる」(サムエル前16・23)
けれども、これは一時的なことだ。霊の世界は、いわゆる霊的な人はよく、そういう波がある。大事なことは、キリストの十字架が土台になっていないと危ない。霊的であるだけ危ない。

サムエル後書23章、これは大事な所だね。

「¹ダビデの最後の言はこれなり。エサイの子ダビデの詔言即ち高く挙げられし人ヤコブの神に膏をそそがれし者イスラエルの善き歌人の詔言。²エホバの霊わが中にありて言いたもう。その諭言わが舌にあり、³イスラエルの神いいたもう。イスラエルの磐われに語たもう……」(サムエル後23・1～3)

「エホバの霊わが中にあり」

と、ここに「中に」という言葉が使つてある。珍しいんです。「わが上に臨む」という言い方があるけれども、「わが中に」という。だから、ダビデは決して「敵は本能寺」をやらなわけです。ダビデ自身が非常にドラマチックな性格の人だから、大変だね。

●エリヤ

今度は、特別な人の所にいきましょう。列王記略上の18章、エリヤです。

「¹²然れど我汝をはなれて往くときエホバの霊我がしらざる処に汝を携えゆかん……」(列王記略上18・12)

アハブとの会話のところだ。そして、今度はバアルとの戦いとなるわけです。

「²⁰ここにおいてアハブ、イスラエルのすべての子孫の中に人を遣り預言者をカルメル山に集めたり。²¹時にエリヤすべての民に近づきて言いは汝等何時まで二つの物の間にまようや。エホバ若し神ならば之に従え、されどバアル若し神ならば之に従えと。民は一言も彼に答えざりき。²²エリヤ民に言いはけるは惟だ我一人存りてエホバの預言者たり。然れどバアルの預言者は四百五十人あり。」(列王記略上18・20～22)

けれども、これは剣で戦うのではない。神を呼んで、そして、火がともつたら真の神で、火がともらなかつたらダメだと。バアルの預言者が朝から晩まで叫んでも、さつぱり火が点かない。エリヤは二、三回叫んだら、

「³⁷エホバよ、我に応えたまえ、我に応えたまえ。この民をして汝エホバは神なることおよび汝は彼等の心を翻えしたもうということを知らしめたまえ



と」(列王記略上18・37)

「心を翻す者」とはいい言葉ですね。ひっくり返してしまう。神さまにひっくり返されなければ、信仰なんてできっこないんでね。

「³⁸時にエホバの火降りて燔祭と薪と石と塵とを焚きつくせり。亦溝の水をすいからせり。³⁹民皆見て伏していいけるはエホバは神なりエホバは神なり」(列王記略上18・38～39)

やっと気がついた。神さまの徴が現れた。

●本質の徴

本質の現れたものを徴しるしという。

「あらゆる過ぎゆくものは徴にすぎない」

というゲーテの有名な言葉。本体の、本質の徴だという。キリストは「神の徴」なんだ。現象体。キリストは、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネでやっていることは全部これは「天国の徴」です。福音は「徴の宗教」。徴を見て、本体に突っ込んでゆかなければダメなんだ。

「徴を見て、ただ徴ばかりを求めているのはダメだよ」

とパウロが言っている通りです。今日は、きれいな花をここに飾ってくださいましたが、これは太陽の光の徴なんだ。白でも黄色でも赤でも水色でも、百花繚乱という。

我々の召団の姿がこれなんです。それぞれの召団はそれぞれの特色をもつて大いにやっていただきたい。全体主義じゃないですから。大きなハーモニー、交響楽となる。

そのエリヤが、今度は、火の車に乗って天界へ行ってしまった。その時に、エリヤの衣鉢をもらったのがエリシャ。これがまた、ある意味においてエリヤ以上の仕事をした。エリヤ、エリシャの、この師弟の関係は、本当に霊的な受け継ぎですね。本当の衣鉢を継いだわけです。

死を見ないで天界へ行ってしまったのは、さっきのエノクとこのエリヤ。モーセとエリヤがキリストに現れたですね。

だから、聖書は要するに、神の霊、神の息、それから来ているところの言葉と業。その角度から読んでいかなかったら、本当は読めない。人間は動かされているんだ、みんな動かされないやつはみんな滅びていく、逆らう奴は。

「聖霊に逆らう罪だけは許されない」

とキリストは言われた。

「他は何でも許してやる、但し聖霊に逆らったらダメだ」と。



●ヨブ

「⁸但し人の衷には霊あり。全能者の氣息人に聡明を与う」(ヨブ32・8)
「氣息」、これが「ルーアツハ」です。

「人の中に霊あり」

とは、霊が中心だからそれに神の霊がかかってくる、神の息が、霊の息が。それで、悟りがくる。

「⁴神の霊われを造り、全能者の氣息われを活かしむ」(ヨブ33・4)

この場合の神の「霊」はもちろん「ルーアツハ」ですが、全能者の「氣息」という字は、これは「ルーアツハ」じゃない。「ネシャマー」という字が使ってあるけれども、内容的には同じことになる。

「²⁸神わが靈魂を贖いて墓に下らしめず、わが生命光明を見ん」(ヨブ33・28)

ヨブ記の33章に「靈魂」という言葉が出てきますが、これは皆「ネシャマー」の方です。

「¹⁴神もしその心を己にのみ用い、その霊と氣息とを己に収回したまわば、¹⁵もろもろの血肉ことごとく亡び、人もまた塵にかえるべし」(ヨブ34・14、15)

この「氣息」も「ネシャマー」の方です。「ネフェエシュ」の方です。しかし、要するに所々に「霊」のことが出ていて、

「神さまの霊が私たちを造った。その息によって生命が来た」

ということがヨブ記にも出ているわけですね。

●詩篇

「⁶もろもろの天はエホバのみことばによりて成り、てんの万軍はエホバの口の氣によりてつくられたり」(詩篇33・6)

この「氣」は「ルーアツハ」「霊」という字です。神さまの霊によって造られた、と。

藤田東湖の『天地正大の氣』ですね。天地正大の氣がいろいろなものを造ったという。

「秀でては富士の高嶺となり

開いては万葉の桜となり

注いでは大瀬の水となり

凝つては百煉の鉄となる」

という。

「天地正大の氣が富士山になったり、桜となったり、そういったものが全部、靈氣からできている」

という。藤田東湖が何を讀んだか知らないが、よくあんなことを言ったものだ。

だから、「病氣」という言葉は素晴らしい言葉です。氣が病む。氣が病めば肉体に響いてくる。氣が、「健氣」になればいいんだ。健氣になったら、肉体は治ってしまう、いわゆる外科的



なものでない限り。あなた方が、我々が非常に生命力に満ちているのは、この健気だからです。しよげないから。いろんな事にでつくわすと、逆に聖霊が働くからあり難くてしようがない。絶対にへこたれない。

「今日はスランプです」

なんて、そんな事は有りはしない。スランプなんて有りはしない。いいですか。絶対にへこたれてはいかん。「いかん」じゃなくて、

「私は絶対にへこたれません」

と。「へこたれてはなりません」じゃない。「へこたれません」と、断定的な言い方です。

「何となれば、聖霊が逆に働きたもうからです」

と。聖霊は何でも反比例してやってくる。調子がいいと、聖霊はへたをすると逃げていつちやう。相対的に調子がいいとね。そんなことでいい気になっていたら、とんでもない。

聖霊とは不思議なもんだね、本当に。私は無教会時代に、

「一体、聖霊とは何のことだろう？」

と思った。内村鑑三全集の中の聖霊の所を私は少し読んだよ。だけれど、やっぱり先生は本当にその中から言っていないものな。内村先生は気迫のある人だから、ある程度の力があります。けれども、残念ながら――先生に全然それが働かなかったとは言いませんよ――

「この御霊でなければ」

という言い方をどこでもやってないものな。

詩篇51篇は、ダビデがとんでもない罪を犯したときです。それがバックになっているんでしょね。学者は必ずしもそう言いませんけれども。

「10 ああ神よわがために清心きよきこころをつくりわが衷になおき霊たましひをあらたにおこした

まえ。11 われを聖前みまえより棄てたもうなかれ。汝のきよき霊たましひをわれより取りた

もうなかれ」(詩篇51・10・11)

きよき霊は来ているんだけど、それを取りきつてはいけません、と。この「きよき霊」は聖霊になるけれども、この「きよき霊」は、いわゆる新約の「聖霊」と同じように思っ
てはいかん。

大事なのは17節の、

「17 神のもとめたもう祭物そなえものはくだけたる靈魂たましひなり。神よなんじは砕けたる悔い
しこころをかるしめたもうまじ」(詩篇51・17)

「くだけたる靈魂」、「砕けたる悔いしこころ」

これが大事なこと。ところが、人間は砕けきれない。「砕け」はキリストの十字架がくださる。これはイザヤ書の53章に出ている。私が「砕け」と言うのはそのことなんだ。自分の砕けた魂は、相対的にはあつたつて結構ですよ。それは砕けなければいけませんけれども、そんなことで始末はつかない。キリストの砕けをたまわるんだ。



「我、キリストと共に十字架せられたり」

とパウロが言ったのは、その砕けをたまわったこと。

「我もはや生くるに非ず、キリストわがうちに在りて生きたもうなり」と。

ペンテコステという五旬節に聖霊が臨んできた。聖霊降臨節はクリスチャンにとっては一番大事な日なんだ、クリスマスよりも復活節よりも。キリスト教の三大節のクリスマスと復活節と聖霊降臨節のうち、聖霊降臨節が一番大事。

ところが、無教会にいた時に、私は無教会で聖霊降臨の特別な集会なんか一回もやったことがない。クリスマスと復活節だけ。それくらい聖霊離れしてしまっている。そしてただ、

「十字架、十字架」

と言っている。困ったもんだね、「無教会主義」というイズムになってしまっている。福音が主義になってしまったら、どうするんだ。藤井先生はあまり「主義」ということを言わなかったけれども、塚本先生はものすごく「主義」と言った。塚本先生というのはなかなか人間味のある幅のある人だったけれどもね。私はそれぞれの先生の善さはちゃんと知っています。決してただ悪口なんかを言っているのではない。それぞれの役割を果たして行かれた。我々はその先を前進する。それるのではない。

「³⁰なんじ^{みたま}霊をいだしたまえば^{すべてのもの}百物みな造らる。なんじ地のおもてを新たに

したもう」(詩篇104・30)

これもそうです、みたまの、神霊の創造の力。

「⁴げにわが舌に一言もないのに見よ、神よ、汝はその総てを知り給う。……

⁷私は何処へ往つて汝がみ霊を離れようや。何処へ遁^{のが}れて汝がみ顔を離れよ

うや」(詩篇139・4、7私訳)

と。「み霊」と「み顔」というのが同義語的に使ってあります。何も偶像はないんだけど、「み顔」だとか「み手」だとか「み足」だとか、そこは非常に具体的に言う。だから旧約は詩的な表現なんです。だけれども、決して偶像を作らない。そこが健全なところです。人格的であると同時に霊的であるわけです。

「あなたのみ霊から離れるわけにはいきません」

というんだ。

「たとい天に昇っても、たとい地獄へ行っても」

と書いてあるよ。

「⁸たとい天に昇るとも、そこにあなたが！ わが床^{とこ}を陰府^{よみ}に布^しくとも、見よ

汝が」(詩篇139・8私訳)

と。どこへ行っても空気はあるのと同じように至る所にあなたの霊が来ている、離れないと。何も、あなた方、整える必要はないよ。人間らしくて結構だ。けれども、魂の根はキリ



ストの中に祈り入り、言葉は全身で叫び入る。

「幼児の如くあれ」

というのはそのことです。

●第一イザヤ

いよいよ預言者に入ります。イザヤ書は旧約の最高峰であり、最深淵である。大変な預言者ですよ、この第一イザヤ、第二イザヤ、第三イザヤは。これは全部、御霊の文字です。エレミヤにはあまり「神の霊」という言葉が出てこない。けれども、エレミヤは本当に神にとつ捕まっている人だ。

「1 エッサイの株より一つの芽いでその根より一つの枝はえて実をむすばん。

2 その上にエホバの霊とどまらん。これ智慧聡明の霊、謀略才能の霊、知識の霊、エホバをおそるるの霊なり」(イザヤ11:1-2)

これはダビデを通して、一つのキリストの預言みたいなことになっている。「謀略才能」は「思慮能力」、「知識」は「智慧」と言った方がいい。神さまの霊はそういう、いろんな方面を持っていらいっしやるから。不思議な言葉ですね、11章のこの言葉は。そういう凄い人が現れるという。

「3 かれはエホバを畏るるをもて^{たのしみ}歡樂とし、また目みるところによりて審判をなさず、耳きくところによりて^{さだめ}断定をなさず、4 正義をもて貧しき者をさばき、公平をもて国のうちの卑しき者のために断定をなし、その口の杖をもて国をうち、その口唇の氣息をもて悪人をころすべし」(イザヤ11:3-4)

この「氣息」も「ルーアッハ」です。そういう、凄いことが起きるぞと。ここには「ルーアッハ」という字がたくさん出てくるな。全部そうです。ここが一番著しい所ですね。不思議な言葉がある。19章の24節。

「24 その日イスラエルはエジプトとアッシリヤとを共にし、三つあいならび地のうえにて福祉をうくる者となるべし。25 万軍のエホバこれを祝して言いたまわく、わが民なるエジプトわが手の工なるアッシリヤわが産業なるイスラエルは福いなるかな」(イザヤ19:24-25)

今の中近東のゴタゴタも、この角度からいって、

「神の前に民族が平伏せば福祉を受ける」

と。同じセム民族なんだ、アラブでもイスラエルでも。それが頑固にやっているんだから。「頑くなる民」と言われているように、ユダヤ人の悪いところは「頑くなる」ことだ。律法の守り方も頑くななんだ。キリストはその頑くなが嫌だから、乗り越えてしまった。

もう、魂は、このキリストの真理のためには、本当に火とならなければダメです、絶対に消えない火に。我々の聖霊は消えません。



●第二イザヤ

「¹³誰かエホバの霊をみちびきその義士となりて教えしや。¹⁴エホバは誰ともにも議りたまひしや。たれかエホバを聴くしこれに公平の道をまなばせ知識をあたえ明通のみちを示したりしや」(イザヤ40・13～14)

神さまがいかに素晴らしい方であるか。

「¹⁷エホバの前にはもろもろの国民はみななきにひとし。エホバはかれらを無もののごとく空しきもののごとく思いたもう」(イザヤ40・17)

と凄いや言があるね。大国、超大国なんて言ったってダメだぞと。イザヤ書の40章あたりは、世界の政治家は預言書を読まなければダメです。

「あれはイスラエルの文献だから」

と、そうじゃないよ。イスラエルを通して神さまは全世界に語っておられる文字なんです。ユダヤ人がどうであると、そんなことは問題じゃない。そういうような、旧約もキリストの光で現在化して読むような読み方ができないんだよな。それは、味をつけているのも何でもなし。本当はキリストに対する隠れた預言なんですから、これは。

「²⁷ヤコブよなんじ何故にわが途はエホバにかくれたりというや。イスラエルよ汝なにゆえにわが訟はわが神の前をすぎされりとかたるや」(イザヤ40・27)

そんなことは思うなと。²⁷節からずうつと有名なところですよ。カーライルがこの40章は文学としても素晴らしい文学だと言っている。畳みかけて言っている。全部これはもの凄い。この言葉を読んでいても、もう言葉が言葉じゃないでしょ。読んでいて、もの凄い力が来る。

「¹わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ。我わが霊をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。²かれは叫ぶことなく声をあぐることなくその声を街頭にきこえしめず、³また傷める蘆をおることなく、ほのくらき燈火をけすことなく、真理をもて道をしめさん」(イザヤ42・1～3)

もの凄い力を持った者は、弱い者に対しては本当にいたわりの心を持っている。小さな霊も踏みにつらない。

「⁵天をつくりてこれをのべ、地とそうえの産物とをひらき、そのうえの民に息をあたえ、その中をあゆむものに霊をあたえたもう神エホバかく言い給う」(イザヤ42・5)

こういうところの「息」という字は、本当は「霊」という字を使いたんだけど、「ネフェシユ」という字を使って、そして、「内容的には同じことを言っているんだよ」という。詩はそういうものなんです。「新しき歌」とかね。

「¹ヤコブよなんじを創造せるエホバいまかくいい給う。イスラエルよ汝をつくれるもの今かくいい給う。おそるるなかれ我なんじを贖えり。我なんじの名をよべり。汝はわが有なり」(イザヤ43・1)



もう贖ってしまったぞと。もう、福音そのものだよ、イザヤ書というのは。「悔改めよ、贖うぞ」というのではない。

「もう、お前は贖ったから、帰ってこい」という言い方をする。

「³われ渴けるものに水をそそぎ、乾^ひたる地に流れをそそぎ、わが霊をなんじの子輩^{こち}にそそぎ、わが恩恵^{めぐみ}をなんじの裔^{すえ}にあとうべければなり」(イザヤ44・3)

「恩恵」と「霊」がまた同義語になっている。

「¹⁵救をほどこし給うイスラエルの神よまことに汝はかくれています神なり」(イザヤ45・15)

「かくれています」けれども、相対的なものに現れている。現れているものが見えないんです。「エホバの霊」という言葉を中心にして拾ってきたわけですが、イザヤ書53章は「霊」という字は出てこないけれども、大変なところだ。53章はイザヤ書の一番深いところです。

「²¹エホバいい給わく、なんじの上にあるわが霊なんじの口におきたるわがことばは今よりのち永遠になんじの口よりなんじの裔^{すえ}の口より汝のすえの裔の口よりはなれざるべし。わがかれらにたつる契約はこれなりと。此はエホバのみことばなり」(イザヤ59・21)

「霊」と「ことば」が同義語に使っている。ここは「霊言」です。

「霊をどこまでもお前たちの口の中に入れてやるぞ。それを語れ」

というわけだ。これは聖霊の一つの預言です。

●エレミヤ

「⁷エホバよ汝^{すす}われを勧めたまいてわれその勧めに従えり。汝我をとらえて我に勝ち給えり。われ日々に人の笑となり人皆我を嘲りぬ」(エレミヤ20・7)

「あなたに圧倒されてしまった。だから黙そうと思っても、あなたの言葉は語らざるを得ない。そうすると、皆に何とかかんとかわれるけれども仕方がない」

ということとは、

「私はあなたに本当に酔っている人間だ」

と。

「⁹預言者輩^{たち}のために我心はわが裏^{うち}に壊^{やぶ}れわが骨は皆震う。且つエホバとその聖言^{きよきことば}のためにわれは酔える人のごとく酒に勝たる人のごとし」(エレミヤ

23・9)

「神さまの言にもうやつつけられてしまって、まるで酔っている人間みたいだ」

と。まあ、新約聖書を読んでいると、酔っちゃうよな、正直。

「なんだあれは少しおかしいな、酒に酔ったか」



と。そうじゃない。

「神の言に酔っているんだ」

と。それ位の人になつてくさいね。

「29 エホバ言いたまわく、我言は火のごとくならずやまた磐を打ち砕く槌の如くならずや」(エレミヤ23・29)

なんて。

●エゼキエル

エゼキエルには「霊」がたくさん出てくる。エゼキエルというのは、非常に霊的な預言者だ。

「20 凡て霊のゆかんとする所には生物その霊のゆかんとする方に往く。輪また

その傍らに上がる。これ生物の霊輪の中にあればなり」(エゼキエル1・20)

と、妙なことが書いてある。

「14 霊われを上にあげて携えゆけば我苦々しく思い心を熱くして往く。エホバの手強くわが上にあり」(エゼキエル3・14)

エゼキエルは霊に捕らえられて、出かけていく。自分の肉体をお留守にして。そして、いろいろな幻を見せられる。エゼキエル書というのは面白い。

「19 我かれらに唯一の心を与え新しき霊を汝らの衷に賦けん。我かれらの身の中より石の心を取りさりて肉の心を与え」(エゼキエル11・19)

この「肉の心」というのは、いわゆる「肉」じゃないですよ。暖かい情のある心という意味です。これを間違えないように。「石の心」とは正に頑くなんです。ここに「新しき霊」「唯一の心」と書いてあるでしょ。これは注目すべき句だ。同じ言葉が18章31節に出ている。

「31 汝等その行いし諸々の罪を棄て去り新しき心と新しき靈魂を起こすべし」(エゼキエル18・31)

この「靈魂」は「霊」です。それから有名なところ、

「1 ここにエホバの手我に臨みエホバ我をして霊にて出で行かしめ谷の中に我を放き賜う。そこには骨充てり。……3 彼われに言いたまいけるは人の子よこれらの骨は生くるや。我言う主エホバよ汝知りたもう。……5 主エホバこれらの骨にかく言いたもう。視よ我汝らの中に氣息を入らしめて汝等を生かしめん」(エゼキエル37・1…5)

この「氣息」というのが「霊」という字なんです。こここの所がみんな「ルーアツハ」という字が使っている。

「彼また我に言いたまいけるは、人の子よ氣息に預言せよ人の子よ預言して氣息に言え。主エホバかく言いたもう、氣息よ汝四方の風より来たりこの殺されし者等の上に呼吸てこれを生かしめよ。……14 我わが霊を汝らの中におき



て汝らを生かしめ汝らをその地に安んぜしめん……」(エゼキエル37・9…14) まるで復活みたいだね、これ。民族の復活。ダメになっちゃったけれども、

「立ち上がれ。霊を注ぐぞ」

と。もう、これは新約の聖霊への前兆なんです。エゼキエル書はそういうように非常に霊が出て、不思議な書ですから、気を付けてください。

「²⁹我わが霊をイスラエルの家にそそぎたれば……」(エゼキエル39・29)

と、29節にも出ている。

●ヨエル

「²⁸その後われわが霊を一切の人に注がん。汝らの男子^{むすこむすめ}女子は預言せん。汝らの老いたる人は夢を見、汝らの少き人^{わかまほろし}は異象を見ん。²⁹その日我またわが霊を僕婢に注がん」(ヨエル2・28…29)

このヨエル書2章の28節が即ちペンテコステへの預言の言葉です。

●霊言・霊業

ひとわたり旧約の大事と思われる所を拾ったわけですが、神の霊、その御言、霊言、霊業、その角度から旧約は読まなくては、本当はつかめない。もう少し本当は、キリストへの預言というところをもうひとつ捕まえていけば、もつとはつきりするけれども、今日はこの「霊」に限って拾ったわけです。要するに、キリストが、「父」と呼んでいるところの神の――

「神は霊にして父なり」

という――その前提の大きな歴史として、神の霊が動いていた。

キリストは旧約聖書をもちろん読まれた。シナゴグで聞かれた。若きキリストがそれで祈られた。ですから、この旧約において働いている、特に預言者を通して語られているところの、神の霊の消息を完全に自分のものとして受けとられて、そして、いよいよ神の前に平伏して、この神霊を預言者以上に本当に受けとられた。キリストは聖霊によって生まれた霊^{ひと}止ですから、特別ですけれども。

だから、ペンテコステの前段階として、特に私は神の霊を中心に、旧約の大事な所を拾ったわけですが、明日は、新約に来たら、もうえらい事になりますけれども。それが本当にキリストにおいて、パウロにおいて、ヨハネにおいて、ペテロにおいて、燃え盛っています。だから、新約聖書がいかに聖霊の力の、光の、生命の書であるかということが非常にはつきりと出てくる。それであるから、ペンテコステにおいて、それに本当につかまえられて、我々自身が「神・キリストの霊」――「神」というのは旧約だ――神・キリストの霊で動きます。その土台は、サタンにやつつけられないための土台は、十字架ですから。どう考えても、それよりか他に道はない。



●詩「ペンテコステ讃歌」

それで、前段階として、私が作った最新のペンテコステの歌がありますから、歌います。
どなたもまだご存知のない歌です。

召団讃歌A56「ペンテコステ讃歌」

(1991年5月1日作 讃美歌273B 「わが魂を愛するイエスよ」の曲で)

- 1 主はこの世にて わび 侘しき霊止よ ひと
父なる神に みことば 祈り入りてぞ
聖言受けて 人に語れど
- 2 主は天地を あめつち
人に耳なく 野花が揺らぐ
幕屋となして 病も死をも
ここかしこにて いのち みたまの力
生命に化して ああパラダイス
現じ給へり 必ず投せん
- 3 我は地に火を
この火燃ゆれば 何をか望まん
然れど受くべき さ バプテスマあり
この身砕くる ゴルゴタの丘
主は十字架の あがない 贖罪を遂げ
復活・昇天 ペンテコステに
祈り待ちたる 人らの中に
火の聖霊を 投じ給へり
- 5 かくてペテロも よみがえ ヨハネ、ヤコブも
古きに死して 甦りたり
御霊の次元 みたま 無比の現実
今や使徒らは あかしびと 主の証人
御霊の光 いずこ 今や何処ぞ
かくも信なき この世紀末
主に投身して なげみ 主にあればこそ
聖霊の火ぞ この身に燃ゆる
- 7 キリスト召団 エン・クリストぞ
我らの使命 何処にありや
十字架・聖霊 生命の根源
これを身証して あかし 貫きゆかん

